

秋の野草は面白い。春には
思い思いの色・形で装いを凝
らし、花を咲かせてきた。い
や、花たらからすれば“思い
思いに”どころか、昆虫たち
を誘い込むため、並々ならぬ
工夫と努力を永々と続けてき
たにちかいない。自分のとこ
ろに来て、受粉をして欲しい
虫を目当てに、その虫が好む
形や色を探求し続け、驚くよ
うな形や方法でことを成し遂
げる知恵の深さに感心させら
れることもしばしば。どこに
そのような知恵を出す脳のよ
うなものがあるのかと不思議
になる。DNAの仕組みなのだ
ろうが驚くことが多い。

虫たちとの条件交渉の末に、
種の保存の証しを得た春の花は

やがて結実させてゆく。次はその種子をどう次の世代の命につないでゆくかの知恵と仕事が残っている。このことは自分の意思で場所の移動ができない植物にとっては大仕事であり、これこそが『命の継承・種の保存』につながる最後の仕事なのである。

どうやら、種子はできるだけ遠くへ移動させ、芽吹き、そこで子孫を増やすことが近親交配にならず、種の保存には必要な行為らしい。その為鳥や地上の動物に運ばせるもの、人の衣服にくっついて移動するもの、風に乗って飛んでゆくもの、自分で弾き飛ばすものなど、ここでも種の保存をかけた工夫と努力が続けられてきた。

先日六甲山で出会った野草“ゲンノショウコ”は、弾き飛ばす方法を選んだ花のひとつである。

